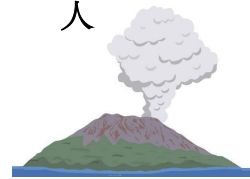


桜島オオヒト奇譚

祁答院隼人



一九一三年一〇月下旬、上之原（現在の鹿児島市吉野町）の原五社神社の境内では宮籠（みやごも）り祭の準備が行なわれていた。宮籠りとは、神社の氏子が拝殿に集まり、神職が祝詞を奏上し、お札と撤饌（てつせん）を下げるものである。多くの神社では八月と九月の一五夜に行われているが、原五社神社では一〇月末に行われている。秋が深まるこの時季は、南国鹿児島でも肌寒さを感じられる月夜であった。

「坊、寒むんかで、今日はこの辺で戻いか」
宮籠りの準備を見守っていた老夫が腰を上げながら、孫らしい幼児に帰宅を促した。

「いやや！オイはまちつとこけえいたいけ

ん！」

すっかりした眼を拝殿に向けた幼児の姿を見ながら老夫は目を細めて笑った。

「おう、そうか、そうか、坊はこけえが好っじゃんか？」

そう言って老夫は孫の横に腰をおろし直した。

「うん！お山（桜島）とお月さんがきれいに観れるこけえが一等すいとう！」

孫の言葉に老夫はいっそう目を細めた。

「この神社は、元は御山の麓の黒神にあったんじや」

江戸時代の安永八年（一七七九年）に桜島で大噴火があり、桜島の黒神の人たちは、吉野へ移住した。故郷をなつかしんで建てたのがこの原五社神社で、祭神は黒神の腹五社神社から勧請したものである。黒神の腹五社神社は、大正大噴火（一九一四年）に埋没した

鳥居の奥に今もある。老夫は独り言を呟くように続けた。

「ワシらは、元々は黒神の民やったが安永の御山の噴火により、こけえ移つて来たんじゃないや、こん神社はワシがちやうど坊くらいの年にこけえできよったんじゃない！」

原五社神社は、桜島黒神村より移住した人等が、故郷の守護神腹五社の祭神を奉斎し、安政三年（一八五六年）に社殿を建て祭つていた。桜島全島の守護神は五社大明神（月読神社）と云われており、島津家歴代藩主の崇敬が篤いことからこの御分霊を勧請して祀り、当地の字名上之原をとり原五社神社と称すると云われている。

「坊の言う通り、御山の神様とお月さんは一緒なんじやって。そして腹五社の祭神には、瓊々杵尊（ニニギノミコト）がおじやる。ニギノミコトは月読様の姉の天照大神の孫で

天孫と云われるんじゃないが、大神の命で日向ひむかの高千穂峰に降ることとなつたんじゃないが、これがこの国の始まりとされる天孫降臨なんじやよ」

幼児は老夫のはなしを聞いているのか聞いていないのか、相変わらず眼を社殿に注いだままであつた。老夫は幼児を優しく見守るように呟きを続けた。

「そしてニニギノミコトの嫁になるのが、山をつかさどる神である伊弉諾尊（イザナミノミコト）の子である大山祇命（オオヤマツミノミコト）の娘の木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメノミコト）なんじや。こんヒメノミコトは、桜島よりもっと大きな御山である富士山の神と云われておるんじゃないや。腹五社にはこん他に、ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメノミコトの子のホオリ（彦火火出見尊ホホデミノミコト・山幸彦）、そしてホオリと

綿津見神（ワタツミノカミ・海の神）の娘の
 豊玉姫（トヨタマヒメ）の子である鵜草葺不
 合尊（ウガヤフキアエズノミコト）、豊玉姫の
 妹の玉依姫命（タマヨリヒメノミコト）が祀
 られておるんじや。そしてこんウガヤフキア
 エズノミコトとタマヨリヒメノミコトの子が
 若御毛沼命（ワカミケヌノミコト）、すなわち、
 初代天皇である神武天皇じやろ」

老夫の呟きは幼児に向けられたものでは
 なく、自問自答のようであつた。

「おんじよ、お山が腹けえとるごたあようじ
 や？」

幼児が放った言葉に老夫は驚き立ち上が
 って桜島を見た。すると、ズーンという地鳴
 りのような音が響いたかと思うと大地が大き
 く揺れ出した。

「坊！こつち来い！おんじよの方に来い！」
 老夫は幼児に覆いかぶさるように抱きか

かえて地面に臥せつた。そしてどのくらいの
 時が流れただろうか。老夫に守られた幼児が
 老夫に耳打ちするように言った。

「おんじよ、もう音は聞こえんよ」

幼児の言葉に老夫は顔を上げて辺りの無
 事を見渡した。

「坊！お前はお山の声が聞けんのか？たいし
 た童^{わっは}じやつて！は！は！は！は！」

老夫はそう言っていると、幼児を高く抱き上げて
 高笑いをしたのだつた。

これより十一月から十二月にかけて、南九
 州一帯で群発地震が発生した。しかしその年
 は、二月二〇日に薩摩藩士出身の山本権兵衛
 が第一六代内閣総理大臣に就任、一〇月十一
 日には川内線が東市来駅から鹿児島駅までの
 区間で開通し、武駅（現在の鹿児島中央駅）
 が開業するなど慶事が続いていたため、だれ
 も桜島の異変を心配する者はいなかった。

年が明けて一九一四年の新年を迎えると、地震発生の間隔も短くなり桜島の一部集落の井戸の水位が低下するなど異変が認められたため、人々はさすがに桜島の噴火が心配になつてきた。そして、松の内が明けた一〇日土曜日は地鳴りを伴う地震が続いて起こったため、週末で賑わう天文館では、街を行き交う人々は皆桜島を眺め、再び大噴火が起こるのではないかと口々に安永の大噴火のはなしをして心配した。

「おんじよ、オイと神社にいつとき行つが！」
一二日のまだ夜明け前、幼児は老夫の寢床に行き、原五社神社に行くことをねだつた。
「坊、んだもんしたん？夜も明けちよらんのに？」

一月十二日の夜明け前の午前六時頃は、南国鹿児島でも寒い朝であつたが、幼児は既に半丁を羽織つていた。

「おんじよ、早う行かんと始まつちよぞ！」
幼児に促された老夫は、何やら胸騒ぎを覚えたため自分も半丁を羽織ると幼児と手をつないで原五社神社に向かった。現在の鹿児島市吉野町からの桜島の向きは、東の空が背景となるため、山の向こう側には薄つすらとオレンジ色の空が浮かんて来つつあつた。
「坊、始まつちゆうと言うたな？いったいなんが始まあとよ？」

老夫は、自分の手を引くようにしながら、手前を黙々と歩く幼児に話しかけてみたが、幼児の返答はなかった。そして二人が原五社神社に到着したときは桜島の上に朝陽が昇つていた。

幼児は桜島が見える展望に立つと身じろぎもせず山に向かつて立ちすくんでしまった。そのため老夫も幼児と同じく山に向かつて立ちすくんだ。すると老夫の手を握つた幼

児の手に力が入ったとたん、物凄い轟音が桜島から響いてきた。

「ドドド~~~~ン」

一九一四年一月一二日午前八時頃、桜島南岳の山頂と中腹から白い煙が立ち登ったのに続き更に大きな音がして大噴火が始まった。

「こりやあいつたい、どげしたこつじや？」

桜島南岳から立ち昇った噴煙はみるみるうちに大きくなつて山の高さの何倍もの高さに及んだ。

「おんじよ、あれにオオヒトさまがおいやつど！」

幼児は山の上の空の天井に届かんばかり立ち昇る噴煙を巨人に見立てているようであった。しかしそれは確かに、大地から天空に立ち上がった巨人のように見えるものであった。

「ドドド~~~~ン、ドドド~~~~ン」

烈しい噴火が繰り返すように続いた。大正三年桜島大噴火では、噴煙がおよそ一八〇〇〇mまで上がり、大量の軽石や火山灰が降り積もつたと云う。

「坊は、こんこつがわかつちよつたな？なんちゆうこつじや？」

老夫は幼児の後ろに廻りそつとその肩を抱きながら膝をついて幼児の目線で桜島の大噴火の様子を眺めた。

「おんじよ、オオヒトさまが腹けつちようぞ？」

立ち昇る噴煙からはときおり稲妻が光るため、幼児にはそれがまさに巨人が怒っているように見えたのだらうと老夫は思った。

「まこち坊の言うとおりじや！あれにおわすオオヒト様は、まこち、月読様じゃつど！月読様はイザナギ様とイザナミ様のお子で、『滄海原の潮の八百重（ヤオエ）を治すべし』



1914年1月12日の桜島大噴火（鹿児島県立博物館蔵）

と命じられたそうじゃ！更に黒神の腹五社にはホオリ様が祀られとるが、その嫁の豊玉姫は海の神じゃって、じゃどん、こんオオヒト様は、綿津見神（ワタツミノカミ）とも縁続きなんじゃ」

「滄海原の潮の八百重を治すべし」とは、潮汐と月の関係を現すと考えられる。また、記紀の山幸彦と海幸彦の段では、ホデリ（火照命・海幸彦）の釣針をなくして困っていたホオリ（山幸彦）が、塩土老翁（シオツチオジ・海人族）の案内によって綿津見神（ワタツミノカミ・豊玉彦）のもとを訪れ、綿津見神の娘である豊玉姫と結婚している。

「おんじよ、ないごち、オオヒトさまは腹かつちよんか？」

幼児はここに來て初めて老夫の方を振り返って聞いた。

「そうじゃのう…。先の日清日露の戦争で、

帝国海軍は黄海海戦と日本海海戦と立て続けに勝利を収めたが、多くのもんが海の藻屑になつてしもたんじゃ…。そん海戦の司令官はどっちも薩摩ん志士じゃったもんな…」

黄海海戦は日清戦争における最大の海戦で、日本連合艦隊の司令長官は薩摩藩士出身の伊東祐亨^{すけゆき}であつた。また日露戦争における日本海海戦の日本連合艦隊の司令長官もまた薩摩藩士出身の東郷平八郎であつた。

「おんじよ、ないごて、薩摩ん志士はそげん海軍にこだわつたとじゃ？」

幼児のこの質問に、老夫は応えることが出来なかつた。薩摩藩は一八六三年八月に錦江湾に進撃してきた英国海軍艦隊の砲撃で、城下の約一割を焼失したほか砲台や弾薬庫に多大な損害を受けるといふ経験をした。西洋列強の近代化された海軍の威力を目の当たりにした薩摩藩士たちは、これからの戦争は海軍の

力が決め手になると考えたのではないか。

「おんじよ、オオヒトさまが今夜上がって来なさるようじゃ！みんな何処かへ逃げんといかん…」

幼児の質問に何とか応えようとしていた老夫は、今の幼児の言葉に驚いた。

「坊！オオヒト様が上がって来つとは、何処に上がって来つとじゃ？」

老夫はこれまでの幼児の言葉が全て実現していたため、今度も間違いなくそうなると考えた。

そして、一二日の一八時二九分にM7・1の地震が発生し、鹿児島市において死者、行方不明者五八人の大災害となったのである。

(作家)

